

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	鮑照「東門行」の心情表現：「思い」の具象化
Author(s)	小西, 美代
Citation	中國中世文學研究, 60 : 12 - 24
Issue Date	2012-03-27
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051435
Right	
Relation	



鮑照「東門行」の心情表現 — 「思い」の具象化 —

小西美代

はじめに

鮑照の文学に関するこれまでの研究の多くは、例えば宇野直人氏が、

彼の詩風は多様であるが、それらの底には一貫して、不遇の悲しみや門閥社会への不満が流れている。特に樂府体の詩の中で個人の感慨を表し、七言歌行詩を多く手がけてこの様式の発展に寄与した。唐の李白、高適、岑参らの七言歌行は鮑照の影響を受けていると見られる。

『漢詩の歴史—古代歌謡から清末革命詩まで』
(東方書店 二〇〇五)

と述べている通り、寒門出身であるが故の悲哀や憤懣が表現されているという内容面から、或いは樂府詩に長じ七言歌行体に優れるという形式面からなされてきた。鮑照が「樂府体の詩の中で個人の感慨を表し」たとする宇野氏の指摘は、恐らく鮑照文学の最も重要な部分を捉え

ていると思われる。

この点について佐藤大志氏は「鮑照樂府詩の特質」(中国中世文学研究)第二十八号 一九九五)で、

鮑照の樂府は、具体的な事柄の叙述を漢代の叙事的樂府より繼承し、更に虚構の中に自己の現実を語るという表現を曹植の樂府から借りている。すなわち、鮑照は漢代の叙事的樂府と曹植の虚構的樂府の表現様式を融合し、具体的な事柄の叙述によつて作品の中に物語を形成し、その虚構の物語の中で自己の現実を語るという彼独自の樂府を生み出しているのである。

(傍線筆者)

とより詳細な分析を加えている。さらに鮑照が自身の感慨を直接吐露するのではなく、物語という虚構を用いて間接的に表現する理由を、「鮑照の文学とその制作の場」(中国中世文学研究)第三十号 一九九六)で、

…享受する者が皇族や貴族であり、またその場が文

学サロンや蕪集であるならば、直接的に自分の不遇を嘆いたり、明らさまに自らの思いを述べることは無粋なこととされるであろう。そこで、鮑照は間接的な表現を用いて、自己の願いや心情を表現したのではないだろうか。このように考えるならば、自己の心情を述べる場合、直接的に吐露するのではなく、物語を通して間接的に表現するという鮑照の樂府詩の特質についても、説明がつくのではあるまいか。

…社交的な場であるが故に、鮑照は直接的な表現を避け、自己の胸中の思いを他者に伝達しようとした。用いられた間接的な表現は、具体的な叙述によって心情の背景となる事柄をも描き、物語的にすること、或いは「擬行路難」の「君不見」型のように具体的な例を提示することによって、その心情に、より具体的な形象を与えている。それは、そのように心情を具象化することによって、直接的な吐露に勝るほどの表現効果を生みだし、他者に示そうとしたからではなからうか。」

(傍線筆者)

と、その制作の場の社交性に求めている。

佐藤氏の研究は、六朝期の樂府文学全体に於いて、鮑照の樂府詩がどこにどのよう位置付けられるかという問題意識から出発していると思われ、鮑照という文人の生涯と、当時の文壇の状況や周辺資料に拠りつつ、鮑照の作品を分類整理することによって、その人物とそ

の制作の場との関係を考察することになったのだろう。したがって鮑照文学の言語表現についても、彼を取り巻く文壇という側面から考察がなされている。

本稿も鮑照樂府の表現方法に分析を加えることを目的とするものだが、「具体的な事柄の叙述によって作品の中に物語を形成し、その虚構の物語の中で自己の現実を語る」という佐藤氏の指摘を踏まえ、「物語」に登場する人物が懐く「思い」が、どのような表現によって描かれていくかを考察していきたい。

鮑照が新しい語を大胆に用いる点は、先行研究でもしばしば言及されてきた。鮑照の用いる言語は鮑照以前に用例が見られないものが多い。もちろん現存資料に前例が見出せないからといって、その語が鮑照の造語であるとは限らない。しかし、少なくとも、鮑照以前にあまり用いられなかった語を如何なる意図を持って鮑照が詩中に配したかを考察することは、鮑照詩の表現の特色を見出す手がかりとなり得るのではないだろうか。例えば堂蕪淑子氏は『石室』の詩をめぐって―謝靈運・鮑照山水詩の比較―(『中国文学報』第七二号 二〇〇六)で、鮑照作「従庾中郎遊園山石室詩」(全十八句)「9怪石似龍章、10瑕壁麗錦質。」句を手がかりとして鮑照の言語表現を、次のように分析する。

「怪石」を含むこの二句は、各地の洞天を結ぶ地下道について述べた郭璞「江賦」の「爰有包山洞庭、巴

陵地道。潜達傍通、幽岫窈窕。金精玉英瑱其裏、瑤珠怪石碎其表。(爰に包山の洞庭、巴陵の地道有り。潜達傍通し、幽岫窈窕たり。金精・玉英、其の裏を瑱ぎ、瑤珠怪石、其の表に碎じる。)「神秘的な数々の寶玉が洞窟の中を埋め、外にもちりばめられている、という表現をふまえたもの。:

「瑕璧」も奇怪なことばだが、「瑕石」なら用例がある。木華「海賦」に「瑕石詭暉、鱗甲異質。(瑕石は暉きを詭え、鱗甲は質を異にす。)(『文選』卷一二)とあり、李善注に「説文」を引いて「瑕、玉之小赤色者也」とあるので、この「瑕」は赤く輝く小玉のこと。郭璞「巫咸山賦」にも「潜瑕石、楊蘭苳(瑕石を潛ませ、蘭苳を楊ぐ。)(『藝文類聚』卷七)とあり、そこが一般世界とは異なる神秘の空間であることを表すものとして登場する。この「瑕璧」も同様の意味合いを持つと思われ、それが錦の生地のように美しいという。

なお「瑕璧」のように、すでにある言葉(この場合は「瑕石」)のうちの一字を別の字に換えて新しい言葉を作るといえるのは、鮑照詩の造語の一つのパターンのようである。「瑕」と「璧」の組み合わせは一見非常に奇妙だが、「怪石」と對にすることによって讀者はたやすく「瑕石」の語を想起することができる。「怪石」の語は、郭璞「江賦」の洞窟描寫を讀者に想起させるとともに、「瑕璧」から「瑕石」を連想させる役割も持た

されているようだ。かく「瑕石」のイメージを借りつつ「璧」の字を用いることで、いつそうきらびやかで妖しげな趣を増しているのである。」(傍線筆者)

ここで堂蘭氏が取りあげている「従庾中郎遊園山石室詩」は山水詩に分類される。鮑照の関心は風物を巧妙に描くことにあっただろう。

巧みに描くために、鮑照は対句に工夫を凝らしたり、「すでにある言葉(この場合は「瑕石」)のうちの一字を別の字に換えて新しい言葉を作」ったりする。この「新しい言葉」への深い関心は山水詩ばかりでなく、樂府詩にも見られると思う。

本稿では鮑照「東門行」で語られる物語中の人物の「思い」がどのように表現されるかを、個々の例を具体的に取り上げながら分析を加えていく。鮑照の「新しい言葉」への関心が大きな役割を果たすことは当然予想されることだが、逆に個々の分析を通して、鮑照がどのように「新しい言葉」を発見していったのか、そのメカニズムの一端を明らかにすることができるのではないかと考えている。

一 鮑照「東門行」と「思い」の具象化

鮑照「東門行」

1 傷禽惡弦驚 傷を負った鳥は弓の弦が震える音を嫌い

2 倦客悪離声 長旅にうんざりした旅人は別離の歌を嫌

う

3 離声断客情 別離の歌は旅人の感情を切断し

4 賓御皆涕零 見送りの客人も旅に連れ行く御者達も皆

涙がこぼれる

5 涕零心断絶 旅人は涙をこぼしながら、心がずたずた

に断ち切られ

6 将去復還訣 いざ行かんとするも再び帰ってきてまた

別れを告げる

7 一息不相知 一息の間さえお互いどうなってしまうか

わからぬのだから

8 何況異郷別 ましてや異なる場所に別れてしまえばな

おさらであらう

9 遥遥征駕遠 はるばる進む馬車が遠ざかって行き

10 杳杳落日晩 ようよう暗くなりゆく日が沈みきれば

11 居人掩閨臥 家に残された者は、閨の戸を閉めて横に

なり

12 行子夜中飯 旅路の者は、真夜中にやっと食事を取る

13 野風吹秋木 野原の風が秋の樹木に吹きつけると

14 行子心腸断 旅路の者は、心も腸も痛めつけられてず

たずた

15 食梅常苦酸 梅を食べれば酸っぱさに苦しめられるも

の

16 衣葛常苦寒 薄い葛の衣を着れば寒さに苦しめられる

もの

17 糸竹徒満坐 管弦楽器の音色が空しく座席を満たし

18 憂人不解顔 憂いを懐く者は顔をほころばせようとし

ない

19 長歌欲自慰 長く声を引いて歌い、自分を慰めようと

したが

20 彌起長恨端 尚更長い恨みの発端を起こしてしまった

「東門行」古辞は『樂府詩集』卷三十七に見える。『樂府

解題』に、「古詞云、『出東門、不顧婦。入門恨欲悲。』

言士有貧不安其居者、拔劍將去。妻子牽衣留之、願共餽

糜、不求富貴。且曰『今時清、不可為非』也。若宋鮑照

『傷禽惡弦驚』、但傷離別而已。(古詞云く、『東門を出

でて、婦を顧はず。門に入り恨として悲しまんと欲す』

と。言ふところは士の貧にして其の居に安んぜざる者有

り、劍を抜きて將に去らんとす。妻子 衣を牽きて之を

留め、共に糜を餽はんことを願ひ、富貴を求めず。且つ

曰く、『今の時は清にして、非を為すべからず』と。宋の

鮑照の『傷禽 弦の驚くを悪む』の若きは、但だ離別を

傷むのみ。」とあるように、鮑照の「東門行」は別離の

悲しみを「倦客」の物語によつて描き出す。

作品全体が別離の悲しみを述べるのだが、作中人物の

思いがより集中的に表されているのは、第3句「断客情」、

第4・5句「涕零」、第5句「心断絶」、第14句「心腸断」、

第18句「不解顔」、第20句「起長恨端」の六箇所だろう。

順番が異なるが、まず第4・5句「涕零」、第18句「不

解顔」

解顔」から分析を加えてみたい。

潘岳「悼亡詩三首（二）」（『文選』卷二十三）に、

撫衿長歎息 衿を撫でて長く歎息すれば

不覺涕霑胸 覺えずも 涕胸を霑す

霑胸安能已 胸を霑す 安んぞ能く已めん

悲懷從中起 悲懷、中より起こる

とある。この四句中、「撫衿」「長歎息」「涕霑胸」「霑胸」はやはり作中人物の「思い」を描く。「撫衿」「長歎息」が感情を表現する具体的動作であるのに対し、「涕霑胸」「霑胸」は泣くという動作の結果、即ち涙が胸を濡らしたことを描写する。鮑照「東門行」の「涕零」も「泣く」という動作の結果の描写である。ここに李善注はないが、「涕零」の語は「古詩十九首」其十（『文選』卷二十九）に「終日不成章、泣涕零如雨（終日 章を成さず、泣涕零つること雨の如し）」とあり、その李善注は『詩経』邶風・燕燕の「瞻望弗及、泣涕如雨（瞻望すれども及ばず、泣涕 雨の如し）」を引く。第18句「不解顔」も動作、この場合は「解く」という動作をしないことよって「憂」という心情を表す。李善は「解顔」について『列子』黄帝に「列子師老商氏、五年之後、夫子始一解顔而笑也。（列子 老商氏を師とし、五年の後、夫子 始めて一たび顔を解いて笑ふなり。）」とあるのを引く。このグループを ①人の動作や動作の結果による心情表現とまとめ

ることにしたい。

次に第14句「心腸断」、第5句「心断絶」について考えてみたい。

第14句「心腸断」は「断腸」という語から発想されたと思われる。『世説新語』黜免篇に「桓公入蜀、至三峡中、部伍中有得猿子者、其母緣岸哀号、行百余里不去、遂跳上船、至便即絶、破視其腹中、腸皆寸寸断。（桓公 蜀に入り、三峡の中に至るに、部伍の中に猿子を得る者有り。其の母岸に縁りて哀号し、行くこと百余里にして去らず。遂に跳りて船上に上り、至れば便即ち絶ゆ。破りて其の腹中を視れば、腸 皆 寸寸に断たる。）」とよく知られる逸話を載せるが、語そのものはこの故事に由来するのではなく、古く曹丕「燕歌行」に「群燕辞归雁南翔、念君客游思断肠（群燕 辞し歸りて雁南に翔け、君が客遊を念へば思ひ腸を断つ）」と見える。

「断腸」は悲しみを表現するために、「はらわたがズタズタにちぎれてしまう」ような、と明確で具体的なイメージを持つ身体感覚を用いている。興奮すれば心臓が早鐘のようにうったり、心配事があれば胃や腸の調子が悪くなったりする。日常生活の中でこのような生理現象は誰もが経験することなので、喜怒哀楽といった感情を表現するのに身体感覚を用いるのは自然なことだろう。

鮑照「東門行」第14句「心腸断」も、「心」が心臓の意であれば、「断腸」と同じく身体感覚に基づく感情表現であると考えるとよいと思う。もちろん、「心」または「心腸」

が形を持たない「こころ」の意味だとすると、また別の分析が必要になるが、この点については後述する。

「心腸断」が身体感覚に基づく感情表現だとすると、心臓も腸も身体の内部にある器官なので、身体の外側からは目で見る事ができない。母猿の腸も「破りて其の腹中を視」て初めて「腸 皆 寸寸に断たる」と分かるのである。このような身体内部に生ずる感覚は他者にはなかなか窺い知ることができない。そこで、「断腸」「心腸断」などの身体内部の生理的な感覚に基づく感情表現は、他人には分かり難い秘められた、だからこそ深い思いを表現できるのではないだろうか。

「心腸断」と同じように、第5句「心断絶」も「心」を心臓とするか、或いは「こころ」ととるかで二様の解釈が可能である。心臓がずたずたに切り裂かれるような生理的な苦痛を描いて「倦客」の別離の悲哀を表現するのであれば、「断腸」と同じグループに属する。

以上に述べたグループを ②身体内部の生理的な感覚による心情表現 とする。

最後に第3句「断客情」、第5句「心断絶」、第20句「起長恨端」について考えてみたい。第14句「心腸断」も「心」または「心腸」が抽象的な「こころ」を意味する場合はこのグループに属する。「心腸」の語は宋玉「神女賦」序（『文選』巻十九）に「順序卑、調心腸。（順序 卑らかにして、心腸を調ふ。）と見える。この「心腸」は恐らく「気持ち」というような意味だろう。「断」字は斧の象

形である「斤」に従い、刃物でたちきることを表す。もともと形のない「気持ち」を刃物でたちきる、このような表現は、「気持ち」に形を与えているとも言える。

例えば、「飲馬長城窟行」古辞（『文選』巻二十七）の、

青青河辺草 青青たり河辺の草

綿綿思遠道 綿綿として遠道を思ふ

「綿綿思」に李善は王逸『楚辞』注の「綿綿、細微之思也。（綿綿は、細微の思なり。）」を引く。李善もまた「綿綿」が「思」を形容すると理解していると考えてよいだろう。

「思」は本来目に見えない抽象的なものであるはずである。「綿綿」が「思」を形容しているならば、一体どのような形を示そうとしているのだろうか。いずれにしても、右に見た「心腸断」と同様に、「思」に形を与える表現だと考えられる。

また、魏・繁欽「定情詩」にも、

何以結恩情 何を以て恩情を結ばん

佩玉綴羅纓 佩玉 羅纓に綴る

と「結恩情」という表現が見える。「結」は「糸でむすぶ」を基本義とする動詞だが、形を持たない「恩情」を目的語とすることで、「恩情」に何かしらの形を与える表現に

なっていると言えるだろう。

鮑照「東門行」第20句の「起長恨端」の場合も、「ももの先の部分」を意味する「端」が「恨」に形を与える。謝靈運「長歌行」にも「覽物起悲緒、顧已識憂端(物を覽ては悲緒 起こり、已を顧みては憂端を識る)」と、鮑照の「起長恨端」によく似た発想を見ることが出来る。謝靈運の「悲緒」は「憂端」と対になっており、「緒」と「端」とがほぼ同じ意味で使われているので、間接的ではあるが鮑照の「起長恨端」と同様の「起く端」という表現を想起できる。

第3句「断客情」も「断」が「情」に形を与える。鮑照以前には「情を断つ」という表現は見当たらないのだが、以後になると彼の継承者が出現する。⁵⁵⁾

第5句「心断絶」も、「心」が抽象的な「こころ」を意味する場合は、「断絶」の語によって形を与えられていることになる。これらのグループを ③ 思いの具象化による心情表現 としていた。

以上に述べたように、鮑照「東門行」に見ることのできる登場人物の「思い」は、

① 人の動作や動作の結果による心情表現

…「涕零」「不解顏」

② 身体内部の生理的な感覚による心情表現

…「心断絶」「心腸断」

③ 思いの具象化による心情表現

…「断客情」「心断絶」「心腸断」「起長恨端」

と、三つのグループに分けられる表現によって描かれる。第5句「心断絶」と第14句「心腸断」とは②に属する可能性もあるし、③に属するとも解釈できる。或いはどちらか一方にはつきり分かれると考えない方がいいのかもしれない。この二つの表現は、人の悲哀の情が生理的な痛みとなることをいうと同時に、「断絶」「断」が悲哀の情に形を与えているのではないだろうか。

また、「断」という動詞に着目してみた時、鮑照「東門行」には、第3句「断客情」、第5句「心断絶」、第14句「心腸断」と「断」を用いた表現が三度繰り返して現れており、この作品の特徴の一つであると言えるのではないだろうか。

「断」という動詞によって切り裂かれるのは、「客情」であり、「心」であり、「心腸」であるが、実は鮑照以前には「断」字がこれらの語と組み合わせられた例は見当たらない。鮑照が新しい語を大胆に用いる点については、「はじめに」で既に言及した。彼が新しい語を獲得していった過程と実態のすべてを解明する用意を、筆者は今の段階では持たないが、この③ 思いの具象化による心情表現」が大きな役割を果たしただろうと予想している。

二 「断」「断絶」と「起長恨端」

前節に述べた鮑照「東門行」に描かれた「思い」に着

目してみた時、この作品の主題について『楽府解題』が「宋の鮑照の『傷禽 弦の驚くを悪む』の若きは、但だ離別を傷むのみ。」と述べるのは、やや正確さを欠くと言えないように思う。主題が別離の悲しみであることは間違いないにしても、第2句「客悪離声」、第17句「糸竹徒満坐」、第20句「長歌欲自慰」に「離声」「糸竹」「長歌」といずれも音楽に関連する語が配されていることからすると、鮑照「東門行」は、ただ別離の悲しみを詠うというのではなく、別離の悲しみを、別れの宴で奏でられる音楽との関わりの中で詠うのではないだろうか。作中人物の心情と音楽と関係についても一度見てみたい。

3 離声断客情 離声 客情を断ち

4 賓御皆涕零 賓・御 皆な涕なみた 零おつ

第3句、別離の音楽が旅人の胸に去来する様々な思いを切断する。「情」が「長くして絶えざる」という形あるものであるとすれば、長い糸のようなものが途中でプツンと切断されてしまうような視覚的イメージを持つことになる。第4句、見送りの来てくれた客人も車の御者も目から涙がこぼれている。「断客情」は前節で述べた③グループ、「涕零」は①グループに属する表現である。「涕零」が他人の目から見ても当人の気持ちを容易に察せられる心情表現であるのに対し、「断客情」は「断」が「客情」

に形を与えるものの、他者には窺い知ることのできない思いを描写する。「離声」が「客情」を「断」ってしまつたことは「客」にしか分からないのである。

5 涕零心断絶 涕 零ちて 心 断絶し

6 将去復還訣 将に去らんとして復た還りて訣る

第5句、前句を蟬聯体で受ける。いよいよ旅立ちの時が迫り、見送りの人や御者の涙を目にすると、旅人も目に涙があふれ、心はずたずたに断ち切られる。「心断絶」は②または③に属する。心臓が切り裂かれる生理的な痛みによって悲しみを描写するのか、或いは「断絶」が「心」に形を与える具象化された思いの描写なのかははっきりしない。けれども、いずれにしても他人には容易に窺い知ることのできない深刻な悲しみを抱えていることを表す。第3句から第6句まで、別離の音楽は旅人の「情」を断つばかりでなく、見送りの人や御者の涙を誘い、涙のために旅人の「心」は断絶する。別離の音楽が「断客情」「涕零」「心断絶」の直接的、或いは間接的な契機となっている。

第15句から第20句の六句が作品を締め括る。「糸竹」の演奏を聞いたり自ら「長歌」することによって、傷ついた自己の心情を鎮めようとしてどうしても鎮めることのできない旅人の姿が描かれる。

15 食梅常苦酸 梅を食ひては常に酸きに苦しむ
16 衣葛常苦寒 葛を衣ては常に寒きに苦しむ

この二句、旅の様子を描く第9句から第14句に連ね、やはり道中の飢えや寒さなどの苦勞を具体的に詠うものと解釈する場合と、「梅を食べれば誰もが酸っぱさに苦しめられることになるし、薄い葛の着物を着れば誰もが寒さに苦しめられることになる」と世の道理を説いていると解釈する場合がある。こゝはやはり次の第17・第18句の「糸竹徒満坐、憂人不解顔」を導き出す「興」の役割を担うと考えた方がよいのではないだろうか。押韻状況もそれを裏付ける。「音楽がこの座に満ちていけば、心に憂いを抱えた人は顔をほころばせて笑うはずがない。」なぜならば「倦客は離声を悪む」からである。この第15・16句は、第1・2句が二つの「悪」を重ねるのに対し、二つの「苦」を重ねることで呼応している。

1 傷禽悪弦驚 傷禽は弦驚を悪む
2 倦客悪離声 倦客は離声を悪む

第1句について李善は『戦国策』楚策を引いて、

魏加对春申君曰、「臣少之時好射、願以射譬、可乎」。

春申君曰、「可」。「異日更羸与魏王处京台之下、更羸谓魏王曰、『臣能虚发而下鸟』。魏王曰、『然则射可至此乎』。更羸曰、『可』。有鸿雁从东方来、更羸以虚弓发而下之」。王曰、『射之精可至此乎』。更羸曰、『此孽也』。王曰、『先生何以知之』。对曰、『其徐徐者、其创痛也。悲鸣者、久失群也。故创未息而惊心未忘、闻弦音引而高飞、故创怯』。今臨武君常為秦孽、不可為拒秦之将也」。

（魏加 春申君に對へて曰く、「臣 少かりし時 射を好む、願はくは射を以て譬へん、可ならんか」と。春申君 曰く、「可なり」と。「異日 更羸 魏王と京台の下に処り、更羸 魏王に謂ひて曰く、『臣 能く虚發して鳥を下さんと』と。魏王 曰く、『然れば則ち射は此に至るべきか』と。更羸 曰く、『可なり』と。鴻雁の東方より來たる有り、更羸 虚弓を以て發して之れを下す。王 曰く、『射の精なること此に至るべきか』と。更羸 曰く、『此れ孽なり』と。王 曰く、『先生 何を以てか之れを知る』と。對へて曰く、『其の飛ぶこと徐かなる者は、其の創 痛めばなり。悲鳴する者は、久しく群を失へばなり。故創 未だ息えずして 驚心 未だ忘れず、弦音を聞き引きて高く飛び、故創 怯ゆ』と。今 臨武君は常て秦の孽為り、秦を拒ぐの將と為すべからざるなり」と。）

と、これが典故表現であることを指摘する。二句が非常

に整った対句であり、いずれの句にも敢えて「悪」という語が用いられていることから、第2句「倦客悪離声」も右の故事を踏まえて理解しなければならぬ。更嬴が虚発によって鳥を落とすことができたのは、その鳥が「傷禽」、即ち「故創」を持つ鳥だったからである。「倦客」が「離声」によって情を切断されてしまうのも、やはり「故創」が胸の中にあつたからに違いない。では、旅に倦んだ旅人が心に負つた古傷とは何だろうか。

それは第9句から第14句までの場面に表現されているのだと思う。この六句は道を行く旅人の孤独を描くが、右にも少し触れたように、この旅が第1句から第8句で描かれる別離の宴を終え、その場から出立した後の旅の様子を描写するものなのかどうか、これまでのいくつかの解釈では実はあまり明確でない。或いはこれから経験することになるだろう旅の苦難を想像しているとも取れるだろう。そこで筆者は第9句から第14句までは「倦客」の「故創」を描いていると考えたい。古傷を描くのであるから、旅人が以前の旅を回想しているのである。

13 野風吹秋木 野風 秋木に吹き
14 行子心腸断 行子 心腸 断つ

第13句、野原の風が秋の樹木に吹きつける。幹や枝を守つてくれるはずの葉は既に散って存在しないのだろうか。寒く厳しい季節の到来を予感させる。第14句、野を吹き

抜ける風は木々を裸にして容赦なく吹き付けるばかりでなく、その音のために旅人の心腸はずたずたに断ち切られる。「心腸断」は「心断絶」と同じく、②または③に属し、心臓や腸が切り裂かれる生理的な痛みによつて悲しみを描写するのか、或いは「断」が「心腸」に形を与え、具象化された思ひの描写なのかははっきりしない。ただ、これが「故創」であるからには、野を吹き抜ける風の音が心臓や腸を切り裂いていく生々しいイメージを読み取らなければならないだろう。第3・4句や第5・6句では「離声」が「情」を断ち「心」が断絶する契機となつたが、この句でも耳に聞こえる風の音が「心腸」を切り裂く契機となつているのである。

「倦客」は以前の旅で「野風」によつて「心腸」が断たれるという「故創」を持つことになつた。そして今もまた別れの宴で演奏される「離声」が「情」を切断し「心」は断絶する。だからこそ「倦客は離声を悪む」のである。以上述べたように、鮑照「東門行」に三度現れる「断」という動詞は、見送りの賓客でもなく車の御者でもなく、いずれの場合も必ず旅人の心がずたずたに切り裂かれる様を描くの用に用いられている。但し、「断客情」の場合は糸のように長いものが分断されるという視覚的イメージを伴うのに対し、「心断絶」「心腸断」の場合は身体内部の器官がズタズタに切り裂かれるという視覚的イメージを伴う。

そして、作品の最後の二句、

19 長歌欲自慰 長歌して自ら慰めんと欲し

20 彌起長恨端 彌いよ起こす 長恨の端

別離の宴の座に満ちる「離声」「糸竹」は別れに臨む旅人の「情」も「心」も切り裂いてしまい、心に憂いを抱える人が顔をほころばせて笑うことなどけつしてない。そこで旅人は「長歌して自ら慰めんと欲」するのだが、結果は「長恨の端を起こす」ばかりなのである。「彌」という表現が効いている。

「彌いよ」とあるからには「起長恨端」は「断客情」「心断絶」と同じ方向の心情を表現しているはずだろう。しかし、「起長恨端」は「断客情」「心断絶」とは異なる視覚的イメージを伴う。「長恨の端を起こす」という表現は前節の③に属し、他人には窺い知ることのできない悲哀を抱えていることを表現している。だが「起長恨端」は長く途切れることがないという形状を想起させる。旅や別離の宴で演奏される音楽は、旅人の心情を切り裂く。しかし、旅人自身が歌う「長歌」は旅人の心に時間的にまた空間的にどこまでも続いて途切れることのない恨みの端緒を引き起こす。作品の最後に示される「長恨端」は第3句「断客情」と対照的な視覚的イメージを結んで呼応するのである。

おわりに

心情表現に着目しつつ音楽と別離の悲哀との関わりを中心に鮑照の「東門行」を読み解いてみた時、彼が作中人物の「思い」を視覚的イメージを伴う表現によって具象化していることが分かる。

冒頭の二句は『戦国策』に見える典故を用いて作品の主題を提示するが、そこでは「傷禽」も「倦客」も「故創」を抱えた存在であることが前提となっていることを指摘した。「創」の本義は切り傷である。旅人の心の切り傷という形象が本稿で分析したような「思い」の具象化を導き出したのかどうかは判然としない。しかし、旅人の心情を視覚的イメージによって描写しようとする鮑照の試みは、「断」という動詞を三度繰り返し用いることで結果的に「新しい言葉」を生み出したのである。鮑照は「新しい言葉」を使うために「新しい言葉」を生み出したのではなく、彼が表現したいと考えたであろう視覚的イメージを伴う作中人物の心情をよりの確に表現するために「新しい言葉」を生み出したのである。月並みではあるけれども、本稿の分析ではそのような結論になろうかと思う。鮑照の他の作品で用いられる「断」字を概観しても本作品の他に③に該当するような表現が見られないことも、その傍証となり得るのである。

鮑照「東門行」には作中人物の「思い」の具象化という際立った特徴があると考え、本稿では特に「断」を中心に分析を加えることになった。鮑照詩の表現方法を究明するには、さらに異なった着眼点が必要になるだろう

と思う。課題は多いが一首ずつ丹念に検討してみたい。

〔付記〕本稿は、平成二十三年度中国四国地区中国学会大会（五月二十八日 於高知大学）及び中国中世文学会研究大会（十月二十二日 於広島大学）において、口頭発表した内容にもついている。当日、有益なご意見をくださったかたがたに、あつく御礼もうしあげる。

注

(1) 『鮑參軍集』『鮑氏集』では「代東門行」と題されているが、『文選』『樂府詩集』に採録されるものは、いずれも「代」字が無い。本稿では李善注を参考にすることが多いので、『文選』巻二十八に収める「東門行」に従った。

(2) 「涕霑胸」、李善注は曹丕「燕歌行」の「不覺淚下霑衣裳」を引く。潘岳以前は涙が濡らす対象の多くは「襟」「衣」「枕」といった身体の周辺に存在する装身具、寝具などのモノだった。涙が胸を濡らすという表現は潘岳以前には見当たらない。この点については稿を改めて論じたい。

(3) 『列子』黄帝篇のこの記事とほぼ同じ内容は仲尼篇にも見え、そこにも「五年之後、心更念是非、口更言利害、老商始一解顔而笑。（五年の後、心に更に是非を念ひ、口に更に利害を言ひて、老商 始めて一たび顔を解いて笑へり。）」と「解顔」の語がある。

(4) 「綿綿思遠道」に王逸『楚辞』注の「綿綿、細微之思也。」

を引くことからすると、李善は「綿綿」を「かすかで小さい」と解したようだが、例えば、『毛詩』王風「葛藟」の「綿綿葛藟、在河之潛。（綿綿たる葛藟、河の潛に在り。）」について「毛伝」は「綿綿、長而不絶貌。（綿綿は、長くして絶えざる貌なり。）」としており、「綿綿思遠道」もこちらの意味で解釈できるのではなからうか。

(5) 鮑照以後の六朝詩中に於ける「心断絶」

梁武帝蕭衍「子夜四時歌 春歌四首（四）」「不見佳人來、

徒勞心断絶。」

梁・江淹「悅曲池」「客子思兮心断絶、心断絶兮愁無開。」

北齊・馮淑妃「感琵琶弦詩」「欲知心断絶、応看膝上弦。」

陳・江総「贈賀左丞蕭舍人詩」「隴頭心断絶、爾為參生死。」

陳・江総「賦得攜手上河梁応詔詩」「秦川心断絶、何悟是

河梁。」

隋・孫万壽「和周記室遊舊京詩」「自然心断絶、何關繫慘

舒。」

鮑照以後の六朝詩中に於ける「心腸断」

齊・積宝月「行路難」「空城客子心腸断、幽閨思婦氣欲絶。」

(6) 土屋聡氏は、「鮑照『代東門行』と古辞『東門行』」その

「代」作の意図についての一考察——（『中国文学論集』第二十九号 二〇〇〇）で、この「糸竹」・「長歌」の二語を前漢の蘇武の作と伝えられる「詩四首」（『文選』巻二十九）其二を典拠とした表現であろうと述べている。土屋氏は、蘇武は李陵という理解者がいたが、「代東門行」の孤獨な旅人にはそれが存在せず、「糸竹」に感情を託して演奏しても空回

りして消えるだけであり、「長歌」も訴えかける相手がいないからこそ、自分自身に向かつてうたい「自ら慰め」ようにするも徒勞に終わっている、と解釈している。

(7) 『文選考異』に、

注「故創怯」 茶陵本「怯」作「隕」。袁本亦作「怯」。

案、今『楚策』作「隕」。此「怯」当是「扞」字之譌、「扞」

「隕」同字、不知者改之。

(注「故創怯」 茶陵本は「怯」を「隕」に作る。袁本も亦た「怯」に作る。案ずるに、今の『楚策』は「隕」

に作る。此の「怯」は当に是れ「扞」字の譌あやまりなるべく、「扞」「隕」は同字なるも、知らざる者之れを改

む。

とある。

(8) 鮑照詩に見える「断」字。(除「東門行」)

「明慮自天断、不受外嫌猜。」(「代放歌行」)

「親友四面绝、朋知断三益。」(「代贫贱苦愁行」)

「酌酒以自宽、举杯断绝歌路难。」(「拟行路难十八首(四)」)

「故乡窅窅日夜隔、音塵断绝阻河閼。」

(「拟行路难十八首(十四)」)

「紫房綵女弄明璫、鸞歌鳳舞断君腸。」

(「代淮南王三首(一)(二)」)

「高岑隔半天、長崖断千里。」(「登廬山詩二首(一)(二)」)

「高山绝雲霓、深谷断無光。」(「登翻車岘詩」)

「臨流断商絃、瞰川悲棹謳。」(「登黃鶴磯詩」)

「推琴三起歎、声為君断绝。」(「発後渚詩」)

「九月寒陰合、悲風断君腸。」(「古辞」)

「拙琴為爾歌、絃断不成章。」(「学劉公幹体詩五首(五)」)

「羊角樓断雲、槿口流隘石。」(「過銅山掘黃精詩」)

「蘭焚石既断、何用特芳堅。」(「詠白雪詩」)